

ナギサ忍法帖～求めるは平穩～

檸檬ソーダ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いろんな漫画の成分ごちゃ混ぜにしたオリ主が成長していく物語です。基本的に原作に沿った内容にしたいと思います。

初投稿になるので生暖かい目で見守ってもらえると嬉しいです

目次

木の葉の里編

プロローグ	1
第一話 やなぎ ナギサ	3
第二話 チャクラコントロール	6
第三話 ナギサの仮説	8
第四話 うずまき ナルト	11
第五話 アカデミー入学	13
第六話 半年間の成果	16
第七話 日向 ソーカ	19
第八話 必殺技	22
第九話 原作開始	25
第十話 対やなぎカオル	27
第十一話 契約	31
第十二話 木の葉崩し	35
第十三話 対大蛇丸&音の四人衆	39
サスケ奪還編	
第十四話 新たな力	44
第十五話 ナギサ	47
第一六話 呪印	51
第一七話 対ナギサ	53
第十八話 人龍一体	56

木の葉の里編 プロローグ

少年は絶望していた――彼自身の生に対してだ。

恵まれない家庭環境、生まれ持った性格、学校での友人関係のストレス。

様々な要因が彼の負担となり、それらは彼の視野をも狭めてしまっていた。

それ故に、彼はおそらくもつとも間違っているであろう選択をした。

それが彼にとっての救いであると信じて。

――

長い夢でも見ていたような感覚と、これまでにないほど晴れ晴れとした意識とともに目を覚ますと、そこは見覚えのない空間だった。あたりは見渡しきれないほどに広く、そして虚無感さえ覚えるほどに何もない場所だった。

いや、何もないというのは間違いだろう、目の前には先程からこちらじつと見つめている老人がいたのだから。

少年は目の前の老人に「ここはどこか、あなたは誰なのかと尋ねた。

「ここは君たちの言い方を借りたところの死後の世界、私は神のようなものだ」

老人は当たり前のようにそう答えた。

少年はここにきて自分の選択が正解であったことに気づき、そして安堵した。

そして続けて少年は尋ねる、自分はこの後どうなるのかと。

「普通ならばこのまま記憶を消して生まれ変わってもらおうところだが、こちらの都合でな、記憶はそのままに別の世界に転生させてもかまわん」

老人はそう言い放った。

かねてより疑問だったことだが人は死後、転生するらしい。そこで少年は考えた、どちらの選択が正しいのかを。

仮に前者を選ぶとしよう。その場合、記憶が消されるのだから、全く新しいスタートがきれることとなり、そこには今までのような悪環境はないかもしれない。しかし逆に今まで以上に劣悪な環境の中に放り込まれることも考えられる。

ならば後者の選択はどうだろうか。記憶を持ち越せることで少の環境ならば自分で改善できるかもしれない。それに別の世界というものにも多少の興味があつた。

そして少年は選択した。別の世界で新たな生を受けることを。

「うむ、了解した。それと一つ言い忘れていたが別の世界は少しばかり危険が多くてな。一つ。なんでも好きな能力を分け与えてやろう」
なんでも好きな能力。そう言われて少年の脳裏には色んな能力が思い浮かんだ。生前、アニメや漫画などを好んでいた少年にとって色々な選択肢が考えられた。

しかし少年がもつとも欲していたものがあつた、それは平穏であつた。もう一度一からやり直せるというのならば、少年が求めるものは平穏な日常、そしてそれを守るだけの力であつた。

「平穏な日常を守る力か。おもしろい。それではそれを可能とするだけの能力を与えてやる、話は以上だ。あとは向こうの世界で確かめるといい」

その老人の言葉とともに少年の意識は深いまどろみの中に沈んでいった。

第一話 やなぎ ナギサ

目覚めると、見知らぬ天井が眼前に広がっていた。

ー知らない天井だ

そう言おうとして気づく、言葉をうまく発音できないことに。

さらに身体動かそうとしても思うように動かせない。そのことに少し動揺するが、しばらくしてある考えにたどり着く。

(転生、したってことか?)

少し身をよじれば視界の端に赤子の腕のようなものが見える、そのことが先ほどの考えに確信を持たせた。

そしてかつて少年だったものは先ほど見た夢について思い出す。

(さっきのじいさんは別の世界へ転生させるとか言ってたが：一体全体どんな世界だ？ 剣と魔法の世界、SFものもありだな。危険が多いとも言ってたし、考えられるのはそこらへんかな)

そうして期待に胸を膨らませている間にある人物が自身に近づいてきていることに気がつく。

「あら、ナギサったら起きてたのね。お腹でも空いたかしら」

その人物は、長い黒髪を後ろで束ね、明らかに主婦然とした格好の若く綺麗な女性だった。

(ナギサ？ 僕に向かって言ってるのか？ 見るからに普通の主婦って感じだけど、もしかしてー僕の母親?)

赤子のーナギサの予想は的中していた。彼女こそ赤子の母親ーやなぎカオリその人だったのである。

(この人が僕の母親？ ずいぶんきれいな人だな、これは今世の顔面偏差値は期待できるんじゃないか?)

などと、ナギサは少し安直とも言えることを考えていると、ナギサ、そしてその母親であるカオリ以外のもう一人の人物がそばに居ることに気づく。

「相変わらずナギサはかわいいなあ。そう思うだろカオリ」

そうカオリに話しかけるのは、筋肉質で、少し癖のありそうなーこれまた黒い髪の毛を短く切り揃えた、一人の男性であった。

(流れからして父親か? いや、それよりも…!)

ナギサの視線はその男性の服装、そしておでこのあたりに釘付けになる。

少し青みがかった服に、若葉のような色のベスト―胸元に複数のポーチが付いたものを着ているその男性の額には…

(木の葉の…額当て?)

漫画NARUTOに登場する木の葉隠れの里、その木の葉の忍びが着用する額当てが巻かれていたのである。

—————

(まさかNARUTOの世界に転生するとはなあ…)

ナギサはその事実を受け止めた。そして混乱する頭で自分が置かれていた状況を確認する。

(とりあえず、木の葉の里に生まれることができたのは運が良かったとしか言えない。霧隠れなんか生まれなくてほんとによかった。

それに両親―やなぎカオルとカオリ夫婦の仲睦まじい様子を見るに、家庭環境も悪くはなさそうだ。それと…)

ナギサは自身の身体に意識を、特に下腹部のあたりに集中させ、そして安堵した。

(よかった、ついてた…!!)

性別が男であることを確認したのである。

(いやね、ナギサ、ナギサって言われるじゃん? そしたら女かもとか考えるでしょ普通。女の子っぽい名前だし。

前世も男だったし性別が変わってなくて安心したよ。赤ちゃん的身體じゃ見て確認するってわけにもいかないしね)

そしてナギサはこれからのことについて考える。

(せっかく転生したんだし、今すぐに転生特典について試してみたかったけどこの身体じゃなあ。チャクラとかについても色々試して見たかったのに…)

しようがない、しばらくは食っちゃ寝して過ごさしますか)

転生したナギサは思いのほか前向きであった。前世での性格が嘘のように。ナギサ自身もそのことに気がついていた。

(体が変わって性格も変わったか? まあでも、悪いことではないかな)
そうやって考えるうちに、身体にかかる疲労感に気がつく。転生
したこと、そしてそれがNARUTOの世界だということが、彼の精
神に負担をかけていたのだろう。

(…もう一眠りするか)

そうして、ナギサは再び眠りにつくのであった。

第二話 チャクラコントロール

5歳になった。

やなぎナギサとしての意識が覚醒したのがおそろくおよそ生後半年前後だとして、それから約四年と半年の月日が流れていた。

もちろん、ただ何もせずに過ごしていたわけじゃない。NARU TOの世界なんて言えばいつ死んでしまうかわからないような世界——今の時代はわりとまともだが、それでも前の世界から比べれば雲泥の差だ。ちなみに今は第三次忍界大戦のあとらしい。

そんな世界において重要なことは何か。それは自分の身をどれだけ守ることができるか、その守る力にあると思う。

そんなわけで、この四年半僕はチャクラコントロールをひたすら練習していた。この世界の武器といえばチャクラとそれから生みだされる忍術なのだから、当然と言えるだろう。

そして肝心のチャクラコントロールの修行内容だが、まず最初の半年をチャクラを練り込むことだけに費やした。

身体エネルギーと精神エネルギーを混ぜ合わせチャクラにする。言葉にするとこれだけだが、どちらも前世では考えられなかったものだ。この過程はなかなか厳しいものがあった。

しかし諦めることなどはできなかった、この修行には文字どうり自分の生死がかかってくるのだから。

そうして半年間食っちゃ寝しながらチャクラを練る練習をし続けた結果、どうにかしてチャクラを練るという感覚をかろうじて覚えることができた。

その後の四年間でもチャクラを練る修行を行い続けたので、五歳現在ではかなり無駄なくチャクラを練り上げることができるようになったと思う。

チャクラを練ることについてはこのように順調に上達した。そうして練り上げたチャクラをどうするか。そう、次に練習するのがチャクラを使用する段階である。

チャクラを使用する、つまり練ったチャクラを術などに変換させ

る作業だが、これが自分でもびっくりするぐらいの才能があった。

いや、そう言い切るのには少し早いかもしれない。実際にチャクラで忍術などを発動したわけではないのだから。

どういうことかというところ、僕はまず練ったチャクラを身体の部位に集めようとした。手や足の裏などだ。その結果、自分でも引くくらい簡単にコントロールすることができた。イメージした量を集めた箇所に。まさに思いのままだった。

実際、壁走りなどやろうとしたら、どの程度のチャクラを足に集まればいいのか、そこらへんはうまくわからないが、強弱のコツさえつかめればあとはイメージでどうにかなると思う。

チャクラを身体の部位に集める修行？の後も様々なやり方でチャクラを扱ったが、特に難しいものはなかった。

身体中にチャクラを巡らせたり、糸のように指先から放出したり、寝具にチャクラを這わせたりもしたが、チャクラを練る修行が嘘のようにスムーズにできたのである。

ようはチャクラの形態変化の才能があったといえればいいか。あるいは、これこそが転生した時に授かった力なのかもしれないが。

それならNARUTOの代名詞、螺旋丸できんじやんとか思うかもしれないが、少し考えて見てほしい。螺旋丸はこの世界でも一部のものしか知らない高等忍術。ぽつと出の僕なんかがいきなりやつたら速攻マーケティングされるだろう。主に暗部とかに。

螺旋丸がほんとにできるかどうかはさておいて、手ごろな修行をだいたいやり終えた僕は、残りの数年をチャクラを練り上げる修行に費やした。

これにはある理由がある、チャクラの元となる身体エネルギーと精神エネルギーとは、修行や成長でしか増えないものであり、それらで決まるチャクラの総量は、それ自体で忍の優劣を決めないまでも、重要な要素であることは変わらないからである。

そうして着々とチャクラ総量を増やしてきた僕、やなぎ ナギサ五歳はこの日、第二のステージ、チャクラの性質変化にとりかかろうとするのであった。

第三話 ナギサの仮説

第二のステージ、性質変化の修行には少し用意するものがある。まず自分の部屋を出て、父さんの書齋に潜り込む。ちなみに父さんは任務、母さんは買い物で今家を空けていて、我が家には僕一人しかいない。そして無数の本棚の一角、忍術の書が集中しているところを物色する。

「火遁忍術中級、土遁忍術中級、イチャイチャパラダ：なんだこれ!?!」

あ、あつた水遁忍術初級!!」

父さんの意外な趣味を見つけたことは置いて、お目当てのものを見つけた僕は、書齋を抜け、リビングへ入り、ベランダから庭へ出た。

我が家の庭はそこそこの広さがあり、おまけに隅には大きめの植木があつた。僕の背丈をゆうに超える大きさである。

そうして庭に出た僕は巻物を広げ、一つの忍術に狙いを定める。

水遁・水手裏剣の術。

手のひらで水でできた手裏剣を生成、投げつける術である。

修行にこの術を選んだのには二つの理由がある。一つは、術の習得難易度が低いこと、そしてもう一つは水を扱うことで、周囲への被害が小さいことである。

特に後者は重要である、家の敷地内で火遁などを使おうもんなら、速攻でボヤ騒ぎだ。父さんの基本性質が水つてのものもあるけどね。

巻物を読み取り、必要な印を覚える。

その後、術の発動に十分足りるであろうチャクラを練り込み、印を結んで術を発動させる。

——水遁・水手裏剣の術!!——

術の発生とともに身体の中のチャクラが動かされる感覚があり、その後手のひらの上に不恰好ながらも手裏剣の形をした、チャクラを多分に含んだ水——チャクラ水とでもよぼうか。が形成される。

そこまで終えて満足し、一度チャクラを霧散させ、術を中断させる。

これで術の発動に必要なチャクラ量は覚えた。――もう一度だ。

それから何度かの術の練習を経てより再現度の高い水手裏剣を作ることに成功していた。

(これで、第一段階クリア。次は…)

――印を使わない水手裏剣の術の発動である。

――

かねてより疑問だったことがある。チャクラの性質変化、形態変化と、印との関係である。

そもそもなぜ忍術などを発動する際、印を結ぶ必要があるのか。確かに印を結ばなければ忍術は発動しないかもしれない。だが風遁・螺旋手裏剣や、原作後半の千鳥などは印を結んで発動していたようには見えない。

そのことが疑問として頭に残っていたのだが、先ほどの水手裏剣で、その解決の糸口が見つかった。そして、これから行う実験ではつきりとする。

――水手裏剣の術!!――

僕は再度術を発動した。今度は印を結ばずにだ。

印を結んだ時の体内のチャクラの流れを、自らチャクラを動かして再現しようとする。

その結果から言うと、術は不完全ながらも成功した。手のひらにチャクラ水の塊を形成するという形だ。

その後何度か同じことを繰り返し返したが、術の結果が大きく変わることはなかった。

このことから、一つの仮説が立てられる。

忍術においての印とは、本来手動で行うはずの形態変化や、状態変化を自動で行うためのものなのではないかと言うことだ。

そのため風遁・螺旋手裏剣などは人力で性質変化を螺旋丸に加え、

物語後半の千鳥などは、その熟練度の高さから印を結ばずに発動することができたのではないか。

だが、物語中には確かに印を結んで発動している術もあった。そのことから察するに、印を結ぶことでより術の完成度を高められるか、省略出来ない印が存在することのどちらか、あるいは両方が考えられる。

これらはあくまで仮定に過ぎないが、この理論が正しいならば、突き詰めると印を結んだ忍術の練習よりも、印を結ばない忍術の練習のほうが、長い目で見れば合理的なのかもしれない。

そう考えたナギサはもうしばらく印を結ばない水手裏剣の練習を続けた。

—————

結論から言ってしまうと、印を使わずともある程度形には出来た。

もう少し難航するかも思ったが、案外、この身体にはこっちの才能もあるのかもしれない。

だが、印を結ぶのと結ばないのではやはり、術の完成度に大きな違いが出た。

その証拠に、印を結ばない水手裏剣を庭の隅の植木に放ったところあまり大きな傷はつけられなかった。

しかし、印を結んだ水手裏剣では、植木の表面を大きくえぐるにまで至った。

これは術の熟練度も関係してるのかもしれないし、この辺りが印を結ばない限界なのかもしれない。現時点でそこまで判断することはできなかった。

「もうしばらくしたら母さんも帰ってくるだろうし、性質変化の修行はこの辺りにしておこう」

そうして帰ってきた母さんに練習台にして痛めつけた植木が見つかり、こっ酷く叱られたことは内緒である。

第四話 うずまき ナルト

「見て、例の子よ」

「今度は何をしでかしたの？」

初めて彼、うずまきナルトを見かけたのはいつだったか。その時見た彼の目は、底冷えするほどに冷たい目だった。

周りのナルトに対する悪感情。それが行動に出たり、あるいは子供ながらに察知したりして、ナルトはその悪感情に触れたのだろう。

それは幼い子供が触れるには醜く、そして冷たい感情であった。そして両親のいない彼は、年の割にあまりにも孤独だ。

そんなナルトを見てみると、自然と助けたいという気持ちが湧き上がる。

もしかしたら、孤独な彼の姿にかつての自分を重ねたのかもしれない。

同じ孤独を知るものだからこそ、彼の抱える悪感情を少しでもなくしてあげたいと思った。

「君って、うずまきナルトくんだよね」

そう言っただけで話しかけてきたのは、自分よりも背の低い少年だった。

目元近くまである黒い髪の毛から覗く黒い目は、なんだか自分を見透かしているような気がして、ナルトは少し身構えた。

「…お前だっただけだよ」

そのことが無意識のうちに行動に出たのであろう。ナルトは少し冷たい態度をとった。

「僕の名前はやなぎ ナギサ。この里の上忍、やなぎ カオルの一人息子だよ」

やなぎ カオル、ナルトはその名前に聞き覚えがあった。なんでも多彩な水遁忍術を使うエリート忍者だとか。しかし同時に疑問に思う。

そんなやつの息子が、嫌われ者の自分などに何の用があるのかと。

「オレに何の用だつてばよ」

「僕さ、アカデミーにもまだ入ってなくて、遊ぶ友達がいらないんだ。だから、よかつたら一緒に遊ばない？」

ナギサの言葉はナルトを驚かせるに十分だった。今までに、自分の名前を知って避けることはあつても、自ら近づいてくるものなどい
なかつたのだから。

「でもオレってば……」

不安そうな表情を浮かべるナルトに、ナギサはこう答えた。

「関係ないよ。君は君だもん。」

ナルトは素直な子供だ。それ故にその言葉はナルトにとって純
粋に嬉しかった。

「へへっ……。いいぜ！一緒に遊んでやるってばよ!!」

それが二人の出会いだった。そしてこの出会いが後に木の葉の
運命を大きく変えることとなる。

—————

ナルト少年、思ったよりもすれてました。

まあ、その扱いを考えればそれも当然なのかもしれない。

しかし、屈託なく笑うその表情は、ナルトが年相応の子供なのだ
と感じさせた。

自分が彼に接触することで、物語の道筋が変わってしまうとした
ら、それは避けるべきなんだろう。

しかし、彼を見て、彼の目を見て、そんな考えは吹き飛んでいた。

少しでもナルトの救いになればいい。そんな思いを浮かべてな
がらナギサはナルトの笑顔を見守っていた。

第五話 アカデミー入学

忍術の修行をしたり、ナルト少年と遊んだりしているうちにあったという間に時は過ぎ、その時がやってきた。

アカデミーへの入学である。

（どうして、偉い人の話ってのはこんなにも退屈に感じるんだろうか）
今は入学式、三代目火影様からのありがたいお言葉を頂いている
最中である。

任務の関係で父さんが来れなかったので、今回は母さんに来てもらっている。

参列している保護者たちの中にいる彼女に目をやると、朗らかな表情でこちらを見ていた。

ちなみにナルト達とは代が違った。ナルトはナギサの一つ年上だったのである。

（それにしても…）

ナギサはこれからアカデミーに通うことを考え、期待に胸をおどらせた。

もとより、勉強は得意な方であったし、忍術や、前世とは異なる一般常識に興味があった。

そしてなによりアカデミーで体術を学ぶのが待ち遠しかった。

これは特別ケンカが好きなのではなく、NARUTOの世界で生きていくには体術は切り離せないものだと考えているからだ。

「話長いなあ…」

そうして、まだ見ぬアカデミーの授業のことを考えながら、火影の話を経く聞き流すのであった。

入学式の後軽いガイドンズを受けてその日は終わった。

アカデミーからの帰り道、僕は母さんとアカデミーのことなどを話しながら帰っていた。

「いよいよ明日からナギサもアカデミー生か。時が経つのは早い

わね」

母さんはそう呟く。

「ねえ、母さん」

そんな彼女に、僕は話しかけた。確かめたいことがあったからだ。

「どうしたの、ナギサ」

彼女は不思議そうにそう答える。

「僕もなれるかな、父さんみたいな立派な忍者に」

父さんは偉大な人物だ。上忍という里としての立場はもちろん、ひとりの人間としてもナギサは尊敬していた。

そんな父親の背中を見て、いつしかナギサはそのようになりたいとまで思うようになっていた。

しかし、ナギサは一度全て投げ出した。だからこそ自分の思いが揺るがないか不安だったのである。

「なれるわよきつと。あなたは父さんの子供なんだもの」

母さんは当たり前のことのようにそう答えた

「そっか…そうだよね」

目標となる父と、自分を信じてくれる母がいること。決して特別なことではないかもしれないが、ナギサはこれがこの上なく嬉しかった。

「ああ、それと」

母さんが思い出したかのように言う。

「帰ったら父さんからサプライズがあるみたいよ。ナギサならきつと喜ぶって」

「サプライズ？一体なんだろう」

父さんはあまりそのような事をする人物ではないため、ナギサは不思議に思い、サプライズの内容を想像したが、これといった予想はできなかった。

—————

その日の夜、いつものように三人で夕食を食べていると、父さんはこう切り出した。

「ナギサも明日からアカデミー生になることだ。今後の修行はオレが見てやる」

突然のことに驚き、そしてこれこそが母上の言っていたサプライズなのだ気づいた。

「ずいぶん急だね」

「もともとアカデミー生になったら修行をつけてやる予定だった。もっともそれより前に色々としていたようだが」

僕は浮かんだ疑問をぶつける。

「修行を見てくれると言っても具体的に何を教えてくれるんですか？」

「主に基本的な水遁忍術と体術について教えるつもりだ」

それはナギサにとって渡りに船であった。ちょうど体術の師が欲しかったところだったからだ。

「オレも任務があるからな、つきつきりというわけにはいかないが、空いた時間で修行を見てやる」

目標となる人物に修行をつけてもらえること。その事は僕を俄然やる気にさせたのであった。

第六話 半年間の成果

アカデミーに入学してから半年ほどが経った頃。

日々の授業と、父上との修行。その両方が軌道に乗ってきた。

アカデミーの方は順調に新たな知識をえることができた。なかでも特に興味があったのが歴史の授業である。なんせここ最近ではおさまったが、少し前まで戦乱の歴史をたどってきた世界だ。その内容を学ぶのはちようど前世の戦国時代の歴史を学ぶ感覚に近く、面白かった。

体術の授業や組手では、父さんじきじきに教えを受けていることもあり、その実力はメキメキと伸びていると思う。クラスメイト相手ならほぼ負けることはなくなった。

しかし問題もある。クラスでの友人関係である。

上辺の付き合い合いなら問題はないのだ。だが深い関係になれるかというとそうもいかない。なんせ向こうは前世で言うところの小学生、こっちは実質高以上である。話が合うわけがない。

そんなこんなでアカデミーでは絶賛ぼっち中なのだ。

なんだか悲しくなってきたので話題を変えよう。

父さんとの修行だが、これがまたためになる。父さんは上忍ということもあり、知識や技術の底が知れないほどにレベルが高い。また、その教え方は理論的で、学ぶ側としてもとてもやりやすい。

学んでるのは主に体術と水遁術で、未だ基本の範疇をでないが、それでもここ半年の自身の成長を実感できるほどだ。この調子でいけば、いずれ父上を超えることもできるのでは？などと考えながら日々の修行にとりくんでいる。

印を結ばない遁術についても調べたことがある。

やはりというか僕の性質変化は水だった。そのこともあって、現状水遁の術でしか試してないが、基本となる水遁であれば印を結ばずとも発動できるようにはなった。それどころかある程度の形態変化させられるようにもなった。これには教えていた父さんも驚いているようだった。

た。

そもそも、形態変化とは厳しい修行の末にある程度、形が決まったものにできるといふもので、全くの縛りなしに形態変化させられるというのは見たことがない。というのは父上の談である。

以前からチャクラの形態変化にはチートじみた才能があるのは自覚しているので、これは所謂異世界特典なのだろうか。それとも生まれ持った才能なのだろうか。

どちらにしたって強くなるのはいいことだと。僕は思考を停止させた。

やなぎカオルにとって自身の息子、やなぎナギサの存在は異質なものであった。小さな頃から教えもしないのにチャクラを練り始め、それどころか上忍である自分から見ても高度なチャクラコントロールをして見せていたのだ。

それはアカデミーにはいつてからも同様で、自身が修行についてのは、そもそも息子の能力を正確に把握しておくためであったのだが、これがまた驚きに満ちていた。水手裏剣という、基本の忍術ではあるが、印を結ばずに忍術を使ったのである。

これは本来熟練度の高い忍術の印を省略、または簡略化するものだが、これには長い修行とセンスを必要とする。アカデミー生ができていいような技ではないのだ。

そのことをナギサに問い詰めたところ、

「練習してたら、普通にできたよ」

と当然のことのように答えたので、少し頭を抱えてしまった。

それどころか、修行をしていくうちにそれ以上のことー印を結ばずに水を自由に形態変化させるといふ離れ業を見せつけられた。

あれを始めて見せられた時、おそらくオレの口は大きく開いていただろう。それほどに驚かされた。

確かに術の形がある程度変えたり、印を結ばずに忍術を使うという技術はあるが、ナギサのそれはそれらの技術とは比べ物にならないほどに高度であった。

その時点で下忍、あるいは暗部への推薦を考えたが、ナギサの性格を考慮してそれもやめた。

息子は基本的に争いを好まない優しい性格の持ち主だと知っていたからである。

自分のような忍者になりたいなど言う息子ではあるが、実際に忍者になるには向かない性格であるとカオルは考える。

その幼さゆえにそのことは伝えてないが、いつか知らせねばならない時が来るだろう。

しかし忍者としての才にこの上なく恵まれていることは事実であるため、このことはカオルを大きく悩ませているのだ。

親としては忍者にはならないでほしいが、里のことを考えるならばそうともいえないのである。

そんな父の思いも知らず、目の前の息子は修行に励むのであった。

第七話 日向 ソーカ

昼間はアカデミーでの授業、夕方は自主修行。

それだけを繰り返す日々が続いたが、それだけに確かな成長を感じられ、充実感のある毎日だった。

ある一つの問題を除いては。

事の始まりは、修行が庭で行うには手狭になり、里の訓練場で修行していた時である。

そのときは印を使わずに水遁術を使う練習をしていた。修行に熱が入り、集中しすぎていたのか、背後から接近する人影に僕は気がつかなかった。

「それ。どうやってやったの?」

僕は急に背後から話しかけられて驚き、術のコントロールを間違えて操っていた水を頭からかぶってしまった。

—————

ずぶ濡れの僕と向かい合うのは、一人の少女。名をソーカというらしい。肩上まである藍色の髪の毛と、白い目が特徴的な可愛らしい女の子だった。

どうやらこの子とはアカデミーで同じクラスらしく、以前から僕のことを知っていたようだ。こちらはまったく知らなかったが。

そして訓練場に練習しに来たところ、僕が印を結ばずに忍術を使っているのを見て、話しかけてきたということだった。

それを聞いて思う。少し困ったことになったと。

もともとのこの印を結ばない忍術——次からは無印忍術と呼ぶ——は、父上からあまり人に見せるなど言われていた。おそらくこの能力が里の暗部などに知られ、取り込まれることを危惧したのである。

それを赤の他人、それもこんな小さな子に知られてしまうとは。これでは彼女の親や友達にもこのことが知られてしまうかもしれない。

どうにかして口封じしておかなければ。そう考えたのと、彼女が

話しかけてきたのはほぼ同時だった。

「その術、私にも教えて!!」

日向ソーカから見ても、やなぎナギサは不思議な少年だと言える。成績優秀、容姿端麗で人当たりも良く、同じクラスの女子達からはかなりの人気を得ていた。

実際に話をしてみたところ、確かに優しそうで、性格も良さそうだったが、周りの子とは少し違うと感じた。一体何が違うのか、その違和感の正体に気づくことはできなかったが、それから彼のことが気にかかるようになっていた。

そしてある日、アカデミーで習った術の復習にと、訓練場を訪れたところ、彼の姿を見つけた。

なにやら集中しているようだったので、邪魔をしないように静かに観察していると、なんと印を結ばずに水遁術を使ったのではないか。

アカデミーでは印を基本として習っていたので、ソーカは驚き、そして彼に近づいて尋ねた。その術はどうやってやっているのかと。背後からいきなり話しかけたので彼はびっくりして自身の術で水浸しになってしまった。これに関しては自分が悪かったと思う。

同じクラスのはずなのだが、彼は私のことを知らず、そのことは少し私を悲しませた。

そうして話していくうちに一つの願望が心に浮かんだ、さっきの術を教えてもらうことはできないかと。

水遁術にはあまり詳しくないが、さっきやっていた忍術が高度なものであることぐらいは流石にわかった。なのでそれを習得できたならきつと周りに自慢できると思った。

それに教えてもらうことで彼と友達にもなれるかもしれない。そう思いお願いしたのだが、彼はしばらく悩んでいた。そして悩んだ末にこう答えた。

「わかったよ。この術を君に教える。その代わり一つ約束して欲しいんだ」

続けてこう言った。教えた術のことは誰にも言わないで欲しいと。

わたしは考えた。この約束をしてしまえば、目的の一つである周りへの自慢はできなくなる。しかし、もう一方の彼と友達になることはできるかもしれない。

そう考え、わたしはその条件で教えてもらうことにした。

——
少し厄介なことになった。こうなるならばもう少し場所を考えて修行すべきだった。

しかし一応口封じできたのはまだよかった。口約束に過ぎないが、しないよりはマシだろう。これで周りに知られた時は、諦めて腹をくくろう。

そう考えて目の前の少女を見る。

「ソーカさんの基本性質はなんだっけ」

まずは相手の性質が分からなければ修行といっても始まらないだろう。

「風だよ。あと呼び捨てでいい。」

彼女は友好的な性格らしい。さん付けは気に食わなかったようだ。

(しかし風か、確か父さんの書齋の巻物の中にあつたな。)

「それじゃあ、今日のところはこれで解散にしよう。明日同じ時間ここへ来るから、修行は明日からね」

「わかったよ」

こうして僕とソーカの奇妙な師弟関係が生まれた。

第八話 必殺技

ソーカとの修行は難航していた。

彼女自身の術のセンスがないのか、あるいは印を結ぶ術に慣れ過ぎてクセになってしまったのか。

おそらく後者だろう。僕は最初から無印忍術を練習していたから、彼女よりも簡単に習得できたのだろう。それに印を結ぶ術ならば、問題なく発動できているのだから。

それに難航しているとは言っても少しずつ良くなっているのだ、このまま修行を続けていくつもりだ。

そして驚くべきは彼女、ソーカは日向一族の人間だった。

いや、初見で気づけよと思うかも知れないが、考えてもみてほしい。この世界は様々な髪色やら眼の色やらが溢れているのだ。多少目が白いぐらいでは、気にならなくなっていた。髪の色が藍色で全体が大人しめに見えることもそう思った原因かもしれない。

そんな彼女、長い髪で片目を隠すようにしているのだが、それについて聞いたところ、

「私の眼、みんなと違うから」

そう言っていた。日向由来の眼の色がコンプレックスなどだろう。しかしさつきも言ったとおり、眼の色とか色々ありすぎてむしろ普通じゃないかとも思ったが、それは個人の感覚なので言わないでおいた。

まあ、白眼はまだ開眼してないようだが、開眼さえしてしまえば遮っている髪の毛の問題なくなると思うので、あまり戦闘に支障はないだろう。

そんな彼女だが、体術の腕は相当なものだった。流石に凄腕の家庭教師にみてもらっているので、負けることはなかったが、組手中少し危うい場面が何度かあった。これが血のなせる技なのだろうか、それとも彼女の才能なのか。

もしくは、彼女もまたアカデミー外で稽古をつけてもらっている

のかもしれない。ちなみに組手中、チャクラコントロールや、柔拳は両者とも使っていない。それを使ってしまうとお互いに怪我をする危険性がぐつと高まるからだ。

そして割と好き勝手してるところを見ると彼女は分家なのだろう。組手中に前髪の隙間から覗く呪印からもそれは伺えた。

宗家と分家の関係については少し思うところがあるが、何か言う権利は僕にはないだろう。

ソーカとの修行はそんな感じで進めていた。

彼女との修行の時間を作ったからと言って、自分の修行をおろそかにしているわけではなく、父さんとの修行もしっかりと行なっている。

最近では基礎能力も伸びてきたので、ここらへんであるものを作っておいた

必殺技の開発である。

—————

必殺技と言えるかわからないが、便利な忍術ならいくつか作ってある。

まず、昔からチャクラコントロールの練習でよく使っていたチャクラ糸。これをいくつも手から放出し、束ねて布のように形態変化させたものーチャクラ布ぬのーである。

これはチャクラ糸本来の性質、ものにくっついたり、伸縮させる性質はそのままに硬度をあげたものである。

これの使い方を極めれば某蜘蛛男のような動きも夢ではないだろう。

現状岩とかにくっつけて振り回すぐらいにしか使っていないが。

そしてもう一つの術。これを術と呼べるかわからないが一応そう呼んでおく。

自身から放出したチャクラを己の周りに球状にとどめ感知能力を上げる術ー円ーである。

名前とかそのまんまであるが、この術の凄いところは円の範囲内ならば物体の形状などを細かく察知できるほか、瞬身の術ーチャク

ラを使った高速移動ーの際など自身の動体視力では追いつかない時なども、この円を使えば感知自体はできるのである。反応できるかはまた別の話だが。

しかし現状は半径5メートルが限界でチャクラの消耗を激しいためあまり現実的な技ではないのかもしれない。

補助系の技に関してはこんなところだ。

そして攻撃系の技だが、これに関しては原作で綱手が使用していたチャクラを拳などに一点集中して放つ。という技術を真似している。

流石に彼女のように指で大地に亀裂を入れたりはまだできないが、大きな岩程度なら全力の拳で割れるぐらいにはなった。

攻撃技にはもう一つ、水遁を合わせたものを練習しているのだが、まだ形にできていないので、完成し次第お披露目したいと思う。

とまあ、こんな具合に原作開始に向けて力をつけているのである。

—————

やなぎカオルは思う。最近息子の様子が変だと。

いや、変なのは今に始まった事ではないが、ここ最近は自分の知らないところで忍術の練習などをしているようだ。

なにやら、訓練場に女の子を連れ込み、その子とともに修行しているようだ。色恋沙汰ならまだいい。しかし無印忍術むいんのこともある。ナギサがまた奇想天外な忍術を開発しないか心配なのである。

こここのところ、体術の実力も着実に伸びていることだし、近いうちに実戦形式で息子の実力を確かめよう。そう決めたカオルであった。

第九話 原作開始

最近父さんの任務が忙しいようで、一緒に修行する機会が減った。

そうなるとう当然自分一人での修行や、ソーカと共にすることが増えるわけで。

ソーカの方は無印忍術が結構上達してきていて、簡単な忍術、例えば風遁・突破などはある程度の完成度で放てるようだった。

体術においても同様で、僕と組手を始めてからは目に見えるほど実力が上がっているようだった。

しかし僕の方はというと、ハッキリ言って実力が伸び悩んでいるのを感じている。

体術に関しては少しずつだが、その腕は上達しているのかもしれない。だが忍術に関して、主に術の規模などがいまいち大きくならないのである。

最近ではチャクラ切れを起こした覚えがないほどにチャクラ総量は多いと思うのだが、おそらくそれに比べて練り込めるチャクラの量が少ないのかもしれない。体が育ちきってないせいかもしれないが。

そうは言っても全力でやれば、水龍弾ぐらいの術の規模ならばできるのですが、アカデミー生としては十分すぎるほどの実力なのかもしれないが。

そういうわけで最近は術の規模を上げるというよりは、力の使い方を工夫してみている。チャクラを一点集中させる体術や、練習中の新技などがその例であろう。

まあ、体術に関してはまだまだ原作の綱手以下だし、新技の方もなかなか人に試せるような技ではないので上達している実感はあまりないのだが。

そのほかにも工夫して効果が向上した術がある。チャクラを周囲に広げて感知能力をあげる技ー円だが、これに水遁を加えることで実用的な技になった。

どういうことかというところ、今までは単純に周囲にチャクラを散布させるだけの技だったので、効果範囲が狭く、チャクラ消耗も大きいものだった。

しかし、チャクラの使い方を工夫し、周囲の水分→水蒸気などにチャクラを練り込み、それをコントロールすることで、効果をそのままに、術の範囲、消費チャクラを節約させることに成功した。ちょうど水場で水遁を使うと、消費チャクラを減らせることと同じ考え方である。

そうして、消費チャクラに関しては八割減、効果範囲に関しては、五倍ほどになり、最大半径25メートルほどまで広げられるようになっていた。

そう考えると、単純な能力に関しては伸び悩んでいても、全体の實力は結構伸びているのかもしれない。

「全力を出す機会とかないしなあ…」

そんな悩みも下忍になってしまえば抱えることもなくなるだろう。そう思い、修行に意識を戻した。

—————

そういえばこの間ナルトにあった時、これでもかと額当てを自慢されたことで気がついたのだが、原作が始まっていたようである。

そういえば時期的にもアカデミーの卒業シーズンだし、自分でもなぜ気づかなかったのかとおもうが、それだけ修行や日々の授業に熱中していたということだろう。

そうなると差し迫ってくるのが、大蛇丸による木の葉崩しか。それまでに自分や周りの人を守れるぐらいに強くなりたいとは思っている。でもアカデミー生ができることなんてたかが知れてるだろうし、守られる側に回るのが無難なのかもしれない。

そうして原作が開始したのと、父さんからの爆弾発言を受けたのは同じころだった。

「ナギサ。オレと戦え。」

それが父さんとの初めての「戦い」の始まりだった。

第十話 対やなぎカオル

「戦え…ですか?」

父さんの一言は、僕を驚かせるのに十分だった。

「そうだ。お前は組手や忍術の修行ならばたくさんやってきた。が、実戦形式の訓練、忍術を組み合わせた戦闘などは経験していないはずだ。だから、今回オレが直接それを教えてやる」

父さんの話を聞きながら、自然と気持ちが高ぶるのを感じていた。ずっと目標としていた父親に、自身の成長をみてもらえると思っただからである。

(それに…)

今までただ修行をつけてもらっていたわけではない。修行中、父さんの動きや術を見ながら、その対策を長年考え続けていたからだ。全ては偉大な父を越えるために。

「その勝負、受けて立ちます」

木の葉の里の訓練場、そこに立つ二人の表情は、対照的ともいえた。

一方は、まだ少年と言える立ち姿で、その顔は目の前の戦いを前に真剣なもので、その目は目の前の男をじっと見つめていた。

もう一方の男、やなぎカオルの方はというと、立ち振る舞いからは余裕が感じられ、反面、付け入る隙が見当たらないほどに実力の高さが伺えた。

「ルールは、一つ直接命に危険のある技は使わないことだ。それ以外ならば何をしても構わん」

ナギサは、その発言に少し恐怖を覚えた。やはり今から本気で戦うのだと。もともとナギサは前世であまり争いを好まなかったため、喧嘩などの経験はほとんどなかった。それは生まれ変わっても同じで、組手などの経験こそあるものの、全力の戦闘などやった試しがなかったからである。

そんなナギサの心境を、察したかのようにカオルはこう言い放つ

た。

「心配するな。オレからの攻撃は急所には当てんし、オマエからの攻撃もモロにもらうつもりはない。オマエはただ、全力で攻めればいい」

カオルの言葉は、ナギサの闘争心に火をつけるものだった。

「随分と余裕なんですね」

「まあな。話は終わりだ。どこからでもかかってこい」

「吠え面かかせてやりますよ…!!」

ナギサは素晴らしい終わると同時に自身を中心に円を発動させた。限界の25メートルまでである。そして全身のチャクラを足に集中させ、蹴り込みとともに放出させる。

蹴り込みを受けた地面はその衝撃によって大きくヒビ割れ、それはそのままナギサの初動の勢いを意味していた。

ナギサはその勢いのままカオルに一気に肉薄し、一撃を加えようとその拳を振り上げる。

(なかなか速いな。だが直線的だ…!!)

カオルはナギサの動きに攻撃を合わせようとする。確かにナギサの動きは速かった。しかし、それと同時にそれに合わせられるカウンターは、回避が困難なものだった。

「普通ならな!!」

だが、そのカウンターの回避を可能とするのが最初に展開した「円」なのである。ナギサはカオルのカウンターの初動からその動きを見切り、振り上げた拳を振り下ろすとともに、その掌から大量の水を噴射し、その勢いで空中の身動きが取れない状況からその軌道をさらに上に変えてみせた。

「な…!!」

放出された水はそのまま目くらましとなり、カオルの視界は一瞬ゼロになる。ナギサはそのうちにナギサの頭上から後ろへ回り込む。

——桜花掌!!

チャクラの一点集中させた拳。威力を落としたといえどそれは必殺の一撃であり、戦闘を終わらせるには十分な攻撃だろう。

「くっ!!」

しかしカオルもさすがというべきか、背後からの気配を感じとり、咄嗟に身を翻すことで腕でガードした。

当然その腕にもチャクラが集中されていたが、桜花掌を完全には防ぎきれなかったようで、そのガードした腕は痺れている。

(まずいな、これでは印も結べん…)

これ以上の近距離戦は不利と判断し、カオルは距離を置こうとするが。

「まだまだア!!」

突如カオルの腕が体ごとナギサに引き寄せられた。

「なんだと!？」

先ほどの一撃を加えた時にナギサがつけたチャクラ布である。その性質は元となったチャクラ糸と同様で、術者の意思によって付着と伸縮が自在にできるのだ。

「これで!!」

チャクラ布が縮むことで二人の距離はどんどん迫っていった。

「終わりだア!!」

再度叩き込まれる桜花掌。しかしその一撃はカオルによっていなされ、逆に隙を狙った蹴りの反撃をくらう。

大きく吹き飛ばされるナギサ。そしてカオルはその内にクナイによってチャクラ布を断ち切ろうとするが、

(なかなかの硬度だ。ただのクナイじゃ無理か。)

そう判断し痺れの取れてきた腕を使い印を結ぶ。

——水遁・水断波!!

カオルは口から放出されるウォーターカッターのような術でチャクラ布を断ち切った。

そうしてる内にナギサはダメージから回復し、立ち上がっていた。

(やっぱ格上相手に体術での近接は無理か。なら…)

——水遁・水乱破!!

ナギサは口から瀑布のような水を吹き出しカオルを押し流そう

とする。だがそんな見え透いた攻撃をもらうカオルではない。

カオルは大きく横に飛ぶことでその攻撃を回避する。だが避け
たはずの爆流から何かに向かってくるのを感じた。

「これは…!?!」

二体の水分身。先ほどの水遁から生み出されたそれらが、カオル
に追撃をくわえようと迫る。

(この程度…!?)

水分身はオリジナルに比べてその能力は大幅におちる。たとえ
二体いるとはいえ、カオルにかかれば一瞬の内に対処可能であった。
しかしナギサの狙いはその瞬間を作り出すことにある。

――水遁・水龍弾の術!!

瞬く間にチャクラを練り上げ放たれた大量の水流は、龍を形ど
り、水分身の一体を殲滅したところのカオルに向かっていった。

(分身は陽動か!!)

すぐに飛び退いてその場を離れようとするカオルだったが、体が
水分身に引きつけられるようにして態勢を崩す。

「まさか!?!」

そう、水分身が組みあつた時、すでにチャクラ布がつけられてい
たのである。

(薄く伸ばされていたために気がつかなかつたのか!)

空中で身動きが取れないカオルに巨大な水龍の顔が迫る。

(かわしきれないっ!!)

瞬間、訓練場に大きな水しぶきが上がった。

第十一話 契約

目の前に上がった巨大な水しぶき。それを見て僕は勝利を半ば確信していた。

しかし、円からの反応を感じて、その確信は間違いだとわかった。
(この反応はなんだ…?)

円からの反応、それは二つあった。一つは自身の父であるカオルのもの、しかしもう一つは…

「まさか、これまで出さざるをえないとはな」

水しぶきがやんだ。そしてそこから現れたのは、巨大な一頭の生き物だった。

蛇のような長い体、いくつもの翼をもち、トカゲのような白い鱗を持つその生き物は、龍と言いつつ表すのが正しいだろう。

「カオルよ。ワシを呼び出したんだ。それ相応の相手なんだろうな」

目の前の大きな龍は、口寄せしたであろうカオルに向け、そう重々しく言い放った。

「いやあ実は…息子との模擬戦をしまして…呼び出さざるを得なかったと言いますか…」

カオルは珍しく歯切れ悪く話している。

「息子だと？お主、自分の息子と殺し合いでもしたいんか」

「殺し合いとかじゃなくてですね…そうしないと後がなかったといえますか…」

あのカオルがめっちゃくちや下手に出ている。それを見て少しの失望感を覚える。

「父さん、その龍は？」

「おお！よく聞いてくれた。この方はオレが口寄せ契約している嵐龍のアマツ様だ」

龍との口寄せ？そんなものは聞いたことがない。いやそれよりも…

「口寄せする暇などなかったはずですが？」

円による感知、それによるとカオルは印を結んだりはしていな

かった。まさか、自分と同じ無印忍術なのだろうか。

「ああそれはな。これだよ」

そういつて見せたのは右手の手首、そこに巻かれた包帯には、何やら術式が刻まれていた。

「あらかじめ口寄せの術式を書いておくことで、チャクラを流して口寄せできる。まあ、一種の裏技みたいなもんさ」

なるほど、つまりあれが父さんの奥の手ってわけか。それなら：「ここからが本番、そういうことですね」

次なる攻撃に向け、チャクラを足に集中させる。そして一歩踏み出そうとして――

「いやいや！模擬戦はここ終わりだ！これ以上はお互い無事では済まないだろうからな。」

盛大に肩透かしを食らった。

――

今は戦いも終わり、木陰で休憩しているところだ。

「まさか、ナギサがここまで強くなっているとは：最後は本当に危なかったよ」

カオルは冷や汗をかきながら言う。

「そんなこといって、本気なんて出してなかったくせに：それにこんな奥の手があるなんて」

僕はそう言って近くにたたずむ龍――アマツの方を見る。見れば見るほどにその威圧感が感じられ、内心、模擬戦があそこで終わったことに安堵していた。

「忍とは常に奥の手を残しておくものだ。それにしてもアマツ様まで呼ぶことになるとは完全に誤算だったがな」

そう話していると、アマツがこちらへ近づいてくる。しかし翼を広げてるだけで羽ばたいている様子はないのだが、どうやって飛んでいるのだろうか。

「ああ、あれは風遁の応用だな。嵐龍であるアマツ様はあらゆる風遁術を使いこなすお方だ」

なるほど。名前に負けないぐらいすごい龍ってわけね。それに

しても、そんなの口寄せするとか大分大人気ないな。

「カオルよ。坊主をわしらに預ける気はないか？其奴、仙術の才能がありそうだ」

それを聞いて驚くと同時に嬉しく思った。仙術といえば、割とチートな能力である。そのの才能があるなんて。

「そうは言ってもですね、ナギサはまだアカデミー生です。仙術の修行にはまだ早すぎますよ」

「なんと、そうであったか。ちっこいとは思ったがそれほどは。ならばもう、ワシからは用はないのオ」

残念。仙術はお預けらしいです。まあ習得に時間がかかるらしいし、来年からは下忍になるしなあ。そんな時間ないか。

「その代わりと言ってはなんですが、こいつに口寄せ契約を結ばせようと思つてですね」

なんだつて？龍との口寄せ契約つてことか？てことは僕もこんなかつこいい龍を呼び出せちゃうってこと？テンション上がるわそれは。

「なるほどのオ。それならばこれを使え。」

そう言つてアマツが口から吐き出したのは大きな巻物だった。

ていうか、この世界の蛇型の生き物は口からゲロゲロと吐き出す癖でもあるんだろうか。

そんなことを考えていると父さんは巻物を広げ、その内の名前が並んであるところを指差して言った。

「自分の血で名前を書き、その下に片手の指全ての指紋を押せ。それで契約完了だ」

そう言われて、歯で親指を噛み切る…のは怖いので、クナイで親指で切れ込みを入れ、そこから溢れる血で名前と指紋を書き記した。

「うまくかけたな。それじゃあ早速口寄せしてみろ。印はー」

父さんの言われるままに印を結び口寄せの術を発動する。するとチャクラが吸われていく感覚と共に、大量の煙が目の前を覆った。

「おお!!」

自分の口寄せ動物…というか龍がどんな姿をしているのか。期

待を込めた眼差し先にいたものは。

「ふうー。ハッゴドゥハッゴドゥ。」

龍とは言い難い、僕と同じぐらいの背丈の太った腹の生き物だった。

赤色の鱗、黄色味がかった大きな腹に胸にはよだれかけらしきものをしているそれは、思い描いていた龍とはかけはなれたものだった。

唯一の龍らしさといえば、その大きな翼だが、重すぎるからだゆえにうまく飛べていないようだ。

「これが、僕の龍ですか？」

「…見たところまだ幼体のようだし、希望を捨てちやいかん」

「お主の息子、口寄せの才能はないようじゃな」

初めての口寄せは散々な結果に終わった。

――――
僕が口寄せした龍。聞いたところ、名前はファルコンというらしい。

なんでも火龍に分類される種類らしく、火を吐くことが得意だそうだ。

実際に見してもらったところ、術の火力は中忍レベルで、範囲も申し分なかった。なおさら他の残念な部分が目立ってたわけだが。

そんなこんなで口寄せ動物（固定砲台）が仲間に加わり、一応の戦力アップをすることができた。奥の手と呼べるかどうかは甚だ疑問だったが。

そうして、来たるべき木の葉崩しに向け、力を蓄えるのであった。

第十二話 木の葉崩し

原作開始からしばらく経った頃。待ちに待ったイベントがやってきた。

中忍試験の開催である。

一次試験、二次試験の内容をナルトに聞いたところ、自分の知っている原作と大きな差異はなかった。

そのことに安心しつつも、試験の裏で行われているであろう木の葉崩しの事を考えると漠然とした不安に襲われる。

父さんに相談しようとも考えたが、何故自分がそんな事を知っているのかうまく説明できる気がせず、断念した。

とりあえずは自分の身と周りの安全を守るくらいしかできることはないだろう。

そんな事を考えている内に、ついにその日、試験当日を迎えてしまった。

父さんは警備の方で仕事があるらしく、僕は一人で試験会場へと向かった。

木の葉崩しが行われるとはいえ、他人の全力の戦い、それも本戦まで残るような実力者達の戦闘を見逃すわけにはいかないからだ。原作のキャラを見たいって気持ちもあるけどね。みなみに入場料が思いのほか高く、数少ないお小遣いのほとんどを失う結果となった。

悲しみに明け暮れながらも座席を確保すると、近くに見覚えのある姿を捉えた。日向ソーカである。

近づくとつれ彼女もこちらに気づいたようだ。

「やっぱリナギサもきてたんだ!」

「そりゃあね。里の一大イベントだしさ」

彼女は数少ない僕の友達であり、一応師匠としてやりとりしている。

最近では無印忍術を様になってきて、日向流の柔拳と組み合わせる。最近では無印忍術を様になってきて、日向流の柔拳と組み合わせる。最近では無印忍術を様になってきて、日向流の柔拳と組み合わせる。最近では無印忍術を様になってきて、日向流の柔拳と組み合わせる。

「なんか失礼なこと考えてるでしょ?」

何故ばれた。エスパーか。

「白眼はなんでも見通すんだよ」

「そんなわけない…よね?」

白眼を開眼してからはその体術にも磨きがかかり、師匠としての立場も危うくなってきてる感があった。

そんな風に話していると、第一試合が始まるようだった。一試合目はナルト対ネジ。審判の合図とともに試合が始まった。

試合はネジの圧倒的優勢で進んだが、ナルトの異常なほどの底力によって形成逆転し、最後には機転を効かせた一撃によってナルトの勝利に終わった。

(あれが回天か。水遁で再現できないかな)

回転による絶対防御。少し工夫すれば攻撃にも転用できそうだな。

その後の試合も概ね原作と同じように進んでいった。

見所といえば、シカマルの影真似とサスケの千鳥だろうか。どちらも相手取るには厄介な能力と言える。

そしてサスケ対我愛羅戦の途中、砂の殻に籠った我愛羅にサスケが千鳥を叩き込んだあたりで、観客席全体に幻術がかけられた。

——幻術返し!!

当然来ることがわかってたので対処もバツチリである。

同時に里全体が急に騒がしくなり、ちらほらと戦闘が起こり始める。砂と音の忍対木の葉の忍の凶である。

とりあえず、隣で眠っているソーカを起こす。突然の事に混乱している彼女を尻目に僕は会場の外を目指す。

「ちよつとナギサーどこいくの!?!」

「母さんがウチにいるんだ!!」

そう言い残し、急いで家の方へ向かう。しかしいく途中で蛇の口寄せが目の前に現れた。三階建ての家以上ある巨大な蛇である。

——桜花拳!!

その土手っ腹に全力の拳を叩き込む。が、その巨大さゆえに大したダメージにはならなかったようだ。依然として暴れている上、今の

一撃でこちらを敵とみなしたようで襲いかかってきた。
突進による攻撃を大きく跳ぶことで回避し、敵への有効策を考
える。

(物理的な攻撃は効果が薄いか。ならば遁術で……)

咄嗟に思いついた策を実行するために口寄せを行い、ファルコン
を呼び出す。

「ぶうく!!なんだあの蛇はく!!」

「ファルコン!!お前が炎で俺が油だ!合わせろ!!」

「わ、わかったよお!!」

――火遁・火龍炎弾!!

――水遁・黒龍弾!!

龍をかたどった炎と、同じく龍をかたどった大量の油。それらが
合わさり、爆炎となって巨大蛇に襲いかかる。

「キシャー!!」

流石の巨大蛇も業火にはひとたまりもなかったようで、しばらく
して地面に倒れこんだ。

「名付けて、火遁・龍^{りゆうじんしゃつか}燼若火ってどこか。あ、やべ燃えうつつた」

そうして鎮火作業をしつつ、急いで家の方へ向かった。

――

家についだ僕が見たものは、見違えるほどに倒壊した我が家だっ
た。

「そんな……」

付近の家も壊れているところが多く、救助活動が行われていた。

無我夢中に救助している人の一人を捕まえる。

「この家の……住んでた……!!女性……!!黒髪の!!」

取り乱しているのが自分でもわかった。

「君はこの家の方の親族かい!?それじゃあ話が早い。第二病院にその
女性は運ばれたんだ。かなりの重症だった。急いで向かった方がい
い!」

その言葉を聞いて、頭の中が真っ白になった。同時に、一緒にい
なかった自分を責めた。興味本位で試験など見ずに、一緒にいるべき

だったと。

後悔、自責、そして木の葉崩しを行った者達に対しての怒り。思考はまとまらなかつたが、行動は冷静だった。

敵に備えて円を目一杯広げて、全速力で病院へ向かった。

その時それを見つけたのは幸運。あるいは不幸かもしれない。

里の外側へ向かう五人の人間を円が察知したのだ。

「あれは…」

恐るべき存在。そしてこの時に限って言えば絶対の怒りの対象。

「大蛇丸…!!」

前世から数えても人に殺意を覚えたのはその時が初めてだった。

そしてこの選択は僕の人生で一番の間違いとなるだろう。

第十三話 対大蛇丸&音の四人衆

木の葉からの逃走を続ける男、大蛇丸は木の葉崩しが失敗したことに歯噛みしていた。

「おのれ、あの老いぼれめ……！」

全てはかつての師、猿飛ヒルゼンによる封印術・屍鬼封尽による、両腕を封印されたのが災いした。

そのせいで忍術を封じられ、撤退を余儀なくされたのである。

音の四人衆を護衛につけ、戦闘からの敗走の途中、疲弊した大蛇丸が、接近する敵に気づいたのと、攻撃を受けたのはほぼ同時のことであった。

——通天脚!!

その攻撃は隊列の最後尾、巨漢の少年、次郎坊に直撃し、その意識を簡単に奪い去った。

チャクラを集中した全力の踵落とし。それによって大地は大きくひび割れ、余波で大蛇丸と残った三忍を吹き飛ばす。

「大蛇丸!!」

白いインナー、黒のパーカーに黒のズボンを身にまとった黒髪黒眼の少年は、鬼の形相で大蛇丸一行を睨みつけ、そう叫んだ。

「ここまでできて追っ手ぜよ」

「どうしましょう大蛇丸様!」

残った音の三忍の内、蜘蛛のように腕を六本生やした男、鬼童丸が前に進みでて、首の途中から人の頭のようなものが飛び出ている男、左近が大蛇丸の側へ駆け寄った。

(私の状态的に、この子達を囮にしても追いつかれるのは時間の問題。なら……)

「ここで殺すわ」

大蛇丸は一瞬にしてそう決断する。

「誰が…誰を殺すって!?!」

全身の滾るチャクラを足へ集中させた踏み込み。それにより爆発的な初速を得たナギサは大蛇丸達に急接近する。

(速い!?だが…)

「やらせんぜよ!!」

――忍法・蜘蛛縛り!!

鬼童丸によつてナギサに目掛けて巨大な蜘蛛の糸が放射状に吐き出される。

――水遁・水斬拳!!

高濃度のチャクラ水によつて切れ味を増した手刀。それにより強靱なはずの蜘蛛の糸は切り裂かれ、鬼童丸はナギサの接近を許した。

(この距離は…いまずい!!)

ナギサは右手にチャクラ水を集中させ、それを高速で軸回転させる。それにより表面が空気に触れ、甲高い音を発していた。

それを見た鬼童丸は両手を犠牲にその技を防ごうとするが、

「防いでみるよ!!」

――武頼貫!!

チャクラの一点集中による馬鹿力。それに水を高速回転させ弾丸のように打ち込むことで、掌底に貫通力を持たせた技。それこそが「武頼貫」であり、ナギサが苦しい修行の末に編み出した奥義である。

ナギサの一撃は六本の腕のガードの上から鬼童丸を打ちのめした。

そして間髪入れずに、ナギサは両腕に水でできた巨大な手裏剣を両の手に作り出している。

――水遁・大風車の術!!

高速回転する、人の胴ほどもあるそれらを、ナギサは残った左近、多由也に向け投げ放つ。

「その程度の術で怯むウチらじゃないぜ!!」

そう強気に言い切ったのは、四人衆の紅一点である多由也。その肌には黒い紋様――呪印が浮かび上がり、その能力を底上げしていた。

ナギサは手裏剣を追うように距離を詰めていく。瞬く間に二人と手裏剣の距離は近くなり、そして迎え撃とうとする二人の目の前

で、手裏剣の形状は突如変化する。

「水遁・水分身の術!!」

カオルとの模擬戦でも使った水遁術から分身を作り出す技、それは上手く左近、多由也の意表をついた。

分身が二人に組みつく。それにより、一時だが大蛇丸が完全にフリーな状態となる。

「うおおおおオ!!」

ナギサが空中に飛び出る。そしてその勢いもそのままに、両手から左右逆向きに、高濃度のチャクラ水を爆発的な勢いで放出する。その反動によってナギサの体は高速で錐揉み回転を始める。

「大激流——」

その回転の勢いそのままに大蛇丸へ急速に接近する。大量の水が回転する様は、まさに中忍試験でネジが見せた「回天」のようだった。

『大蛇丸様!!』

助けに入ろうとする二人だったが、分身による妨害がそれを許さない。

「着弾オ!!」

刹那、大量の激流が大蛇丸を襲った。その広範囲にわたる攻撃は、周りの木々をなぎ倒し、辺りの人影を完全にかき消した。

「—————」

攻撃によってできたクレーター。その中心でナギサは大きく肩で息をしていた。

(今出せる最大火力に、回転というアイデアを加えた一撃。即席でやったがうまくいったな)

そして、周囲の状況を確認する。少し遠くに左近と多由夜の姿を見つけるが、大蛇丸の姿は見えなかった。

そう思っていると、突如として背後に円による反応が現れた。

「——下になっていたのか!？」

地面から飛び出した大蛇丸の首。その口には草薙剣が咥えられ

ており、それはナギサに向けて振り下ろされる。

「チイツ!？」

斬撃をかわしきれず肩に傷を受けながらも、ナギサはその場を飛び退いた。

しかしその先には状態2となり、鬼の様な見た目になった左近が待ち受ける。

ー多連拳!!

左近の体から二本の腕を生やした三本腕による掴みは、ナギサの体を拘束する。

「この程度…最大火力の水遁で…」

ナギサは拘束されていない右手で水を放射させ、吹き飛ばそうとする。が、ちょうどその時、円がこちらへ飛来する物体を捉えた。

ナギサと左近に絡みついたそれー鬼童丸の蜘蛛の糸は二人の自由を完全に奪い去る。

(これは…鬼童丸は倒したはずじゃ…!)

糸が飛んできた方向を見ると、体を黄色い鎧で覆った鬼童丸が目に入った。

(蜘蛛粘金で防いでいたのか!!)

糸を硬質化させることにより作り出されるそれは最強の矛とも盾ともなる。

ナギサはここに来て自身の置かれた状況の危うさに気づく。

そして水斬拳によって拘束を解こうとしたその瞬間、ナギサの耳に笛の音色の様なものが届く。

(これは…多由也の幻術か…)

幻術は徐々にナギサの体の自由を奪っていく。

(こんなところで…母さん…)

ナギサの必死の抵抗も虚しく、彼の意識は暗い闇の中へと沈んでいった。

「大蛇丸様、そいつは殺しましょう!危険すぎます!!」

笛によってナギサの意識を奪った張本人、多由也は大蛇丸にそう進言する。

「いいえ、この子はアジトに連れて帰るわ。多由也はこの子を。左近はそこでのびてる次郎坊を連れて来なさい」

『っはー！』

残った三忍はそれぞれ違う思いを浮かべながらも、大蛇丸の命令通りに行動した。

(思いがけない戦闘だったけれど…いい拾い物をしたかもねエ…)

大蛇丸は不敵な笑みを浮かべながら、唇の渴きを舌で潤した。

サスケ奪還編

第十四話 新たな力

大蛇丸が起こした木の葉崩し。それは木の葉隠れの里に多大な被害をもたらした。死傷者や行方不明者も多く出たこの事件。中でも大きかったのは、三代目火影の殉職であろう。

火影は里の民の心の支えとも呼べる存在だった。それを失い、民衆の心には大きな傷跡ができていた。

他にも家族や恋人を亡くした人々もおり、里には悲しみが蔓延していた。

里の上忍、やなぎカオルもその一人である。

初めに聞いたのは、妻、カオリが重症であるとの報告だった。動揺しつつも病院に向かい、その先で命に別状はないと聞かされ、一応は安心できた。

しかし、続けざまに息子、ナギサが行方不明であると知らされ、そして取り乱した。

自分が本気を出さざるを得ないほど強いとはいえ、まだアカデミー生、子供なのである。親として当然のように心配し、自身もまた捜索に参加した。

そうして得られたのはナギサの身柄ではなく、大蛇丸一行に連れ去られるのを見たという情報だけであった。

それを聞いてカオルは絶望した。大蛇丸といえば、酷い人体実験の末、里を追われた抜け忍である。そんな人物に息子の命が握られていることを知り、いてもたってもいられなかった。

里の上層部に息子の奪還任務を命じるように詰め寄った。しかし、火影不在の上、先の事件による被害の復興もできてない今、そのような任務は命じられないというのが、里の判断であった。

ならば、自分一人でもナギサを助け出す。カオルはそう決意した。たとえそれが小さな望みであったとしても。

左肩の鋭い痛みによって目を覚ました。

左の首筋が焼けるように痛い。今まで感じたことのないほどの痛み、のたうちまわろうとするが、身体が拘束されてるようでそれも叶わない。

「……は……!?!」

混乱する頭で状況を確認する。

今いる場所は薄暗い部屋で、いくつかの蠟燭があかりとなつている。そしてすぐ近くに人影が見えた。

「どうやら目が覚めたようね」

「大蛇丸……!」

目の前の男、大蛇丸は続けてこう言った。

「悪いけど、寝てる間に呪印をつけさせてもらったわ。どう、痛むでしょう?」

痛みの正体がわかった。大蛇丸の呪印。それは強大な力を得る代わりにその意思を大蛇丸に縛られ、適応できなければ最悪死ぬほどの凶悪な代物なはずだ。

「俺をどうするつもりだ……?」

「どうするつもりもないわ。ただ少し強くしてあげようと思ってね。中々見所がありそうだしねえ」

(一体何を考えてる? いや、それより拘束をどうかしないと……)

拘束を振りほどこうと体にチャクラを込める。すると首筋を中に激しい痛みがはしる。

「無駄よ。呪印もまだ馴染んでないし……強引に力を出そうとすれば最悪死ぬわよ?」

(本当に何を考えてる? 殺すことが目的なら既にそうしてるはず、となれば転生先として選ばれたのか?)

大蛇丸には他人の身体を乗っ取り自分のものにする術があり、原作でその術の対象として選ばれたのがあのうちはサスケだった。

その代わりとしてこうして連れてこられたのかもしれない。

(ならなおさら逃げ出さないと……)

そう思い、再びチャクラを練り込む。

「無駄だと言ったでしょう。それともここで死にたいのかしら？」
鋭い痛みが再び身体をはしった。だが、これでわかったことがある。

呪印による痛み。つまり呪印に侵食され始めるのは、チャクラをおよそ全力の三割程度練りこんだあたりからだ。ならそれ以下のチャクラを使えば…

——水遁・水斬拳!!

水を纏った手刀によって手の拘束を解く。続けて足の拘束を断ち切り、戦闘態勢に入る。

「やっぱり面白いわ…あなた」

チャクラを身体に巡らせ大蛇丸に突貫する。その動きは普段より数段劣るが、相手もまた本調子とはいえないはずだ。

「このまま押し通る!!」

「だから無駄だと言ったでしょう」

——印!!

大蛇丸が印を結ぶと同時に再び首筋が刺すように痛み、今度は思考はまで妨げられてるような気がした。

「術者の私がコントロールできないはずないでしょう」

そのままモヤがかかるように意識が遠のいていく。

「ちようどいいわ。このまま眠っていてもらおうかしら」

そのまま意識は深い闇に沈んでいった。

第十五話 ナギサ

何度目かわからない激痛に目を覚ます。

薄く開けた目からは、自らの拘束された手足に、幾つもの管のようなものが皮膚に突き刺さっているのが見える。

今が何日か、大蛇丸に捕まってからどれくらいの間時間がたったのか。

意識がひどく薄れる。投与されているであらう薬物の影響か、呪印のせいかはわからないが。

朦朧とする意識の中、重傷と聞かされた母親のことを思い出した。

(母さん・・・無事だといいなあ・・・)

もう戻れるかもわからない、あのあたたかな場所を想像して、涙が頬を伝った。

――

木の葉崩しの失敗。その事実は大蛇丸をひどく腹立たせたが、同時に思いがけない収穫もあった。

木の葉を出る際に歯向かいに来て、戦いの末捕らえた少年。調べたところ、木の葉の上忍の息子らしいが、そんなことは大蛇丸にとってはどうでもいい事。

少年、名をナギサというらしいが、彼の戦闘力は異常の一言に尽きる。

アカデミー生か疑わしいほどの忍術の規模に、洗練されたチャクラコントロール。そしてそこから生まれる高レベルな体術。

その一撃は同じ三忍の一人を連想させるほどだった。

そして、その高い技術を持った少年が今は自分の手の内にあるという事実が、大蛇丸の心を大きく躍らせる。久しく覚えのなかったほどに。

そういえばと、大蛇丸は思い出した。彼の繰り出した忍術のすべて

に印を結ぶ前動作がなかったと。

大蛇丸はさらに高揚した。これが確かならばそれは類まれなる才能であり、その能力はあのうちは一族の生き残り、うちはサスケにも匹敵するかもしれない。

管理も兼ねた呪印は幸いうまく定着した、薬物による肉体の強化も進んでるころであろう。

「これから面白くなりそうねえ・・・」

こみあがる喜びを隠しきれずにはいた言葉が、静かな部屋にかすかに響いた。

――

「ナギサを必ず連れ戻す」

事の当初はそう決めたカオルであった。しかし、里としての機能が低下している今、搜索に人手が割けないこと、大蛇丸に対する戦力不足。そして何よりも重体のカオリ一人を置いていくことなどできず、ナギサ救出に向かえなかった。

そうして救いの手も届かぬ中。流れる月日とともに。

大蛇丸による度重なる薬物投与、拷問とも呼べるほどのそれによつて。

ナギサの肉体は、心は。

少しづつ壊れ始めていた。

そして一人の少年の心を壊すには十分すぎる、決定的な出来事が起こる

大蛇丸に打たれた薬のせい、逆らおうとか、逃げようとかの気持ち
ちが薄れてきた気がする

向こうもそれがわかってるのか今では拘束も緩めだし、ある程度の自由も与えられている。

そんな風に少し状況に慣れ始めてきたとき、

「やなぎカオリの死亡」

大蛇丸の部下であるカブトからそれを告げられた。

淡々と、明日の天気でも話すみたいに。

体が、心が悲鳴を上げた。これ以上は聞きたくない。これ以上は壊れてしまうと。

「考えられたことだ。わかっててあのととき飛び出したんだ」

頭ではそう取り繕うとも、うまく呼吸ができずベッドから転がり落ちる。

そんな僕を気にも留めずに、カブト続ける。

「続けざままでわるいんだけどさ、今朝方敵の忍の侵入があつてね。その忍っていうのが君と関係深いっていうか……まあこれを見てよ、そのほうが話が早い」

そうして取り出されたのは一つの布で包まれたもの。人の頭ぐらいの大きさだろうか。ところどころ赤く染まっており、少し異臭を放っている。

僕はその布に手を伸ばす、中を確認するために。

布の端をつかむ。脳がけたたましく警鐘を鳴らす。

そしてその中身が露わになった。

やはりそれは人の頭だった。戦闘によるものだろうか。いくつもの生傷がありながらもその顔ははっきり認識できた。

それは間違いなく父さんの顔だった。

大蛇丸のせいとか、僕が捕まらなかったらとか
そういうことを考える余裕すらなく

母とそして父の死を

目の前の状況を

受け止められなかった。

だから僕は

こわれてしまった。

人格の改変。

それには大きなショックが必要である。そう大蛇丸は考えた。

よって薬物の投与によつて思考力を奪い、そして自身の両親の死を伝えた。思考を制限されたナギサでは、その事を疑う力すらなく簡単に信じた。あまりに大きいショックに心は耐え切れず、彼の人格は崩壊した。

そしてもう、彼の頭には家族との思い出は一つもない。残ったのは忍としての戦闘技術とナギサという名前だけ。

「さて・・・どう育ててあげましょうかねえ」

カブトの報告を聞きながら大蛇丸はこれからのことを考える。すべては己の新たな身体のために。

第一六話 呪印

ナギサの人格を破壊し、そして完全にその心を掌握した大蛇丸。その手によって新たな実験がナギサに施されようとしていた。

支配されたナギサの人格は、完全に自分の記憶とともにその意思をなくし、大蛇丸のただ一つの命令、「己の力を高める」ためだけに行動している。そこで大蛇丸は考える、重吾の力。仙人化をナギサに授けられないかと。

仙人化とは大蛇丸の配下である重吾の一族が使う能力である。周囲の自然エネルギーを取り込み、自身のチャクラとともに練り上げることで能力を引き上げるものだ。その効果は絶大だが、自然エネルギーの扱いは非常に難しく、コントロールできず、精神に異常をきたす。

しかし、意思もない、ある意味で安定しているナギサなら精神面のデメリットを抑えられるのではないかと。

大蛇丸の気に入った忍につけられる呪印。仙人化の力を再現できるように与えられるそれは、取り込む自然エネルギーの量を制限するよう設定されている。そのおかげである程度デメリットを防いでいる。

ナギサに限っては呪印を精神の支配も兼ねて使っているので取り除きこそしないものの、自然エネルギーの吸収を違う形で行おうということだ。

それこそが重吾の仙人化の能力であり、それを行うための彼の細胞である。これ以降、呪印細胞と呼ぶ。その移植の前段階として、データ上拒否反応の低い、うずまき一族の移植が決まる。

大蛇丸の配下、香燐のものであるその細胞は、移植者の生命力を上げ、それより拒否反応の大きな呪印細胞への適合の手助けになるだろうということだった。

そうして行われた移植手術は、結果だけを見るならば成功したと
いっている。

それぞれの移植で拒否反応こそ出たが、段階を踏んだことで、難し
いと思われていた呪印細胞への適合も成功した。

そうして得られた仙人化の能力は呪印をキーとして発動し、体中の
呪印細胞から自然エネルギーを取り込み、己の力とした。精神への負
荷も比較的抑えられたようで、いわゆる状態1の時は問題なく行動し
ているようだ。

問題は状態2である。それは自然エネルギーを多く体に取り込ん
だ状態であり、驚異的な能力を得るが、それに伴って殺人衝動などが
生まれる。オリジナルである重吾などは強すぎる衝動を抑えられず、
見境なく周囲へ攻撃してしまうほどである。

その力を試すための当て馬は、ちょうど大蛇丸のもとへ迫ってきて
いた。

うちはサスケを木の葉からさらった音の四人衆。それを追ってい
る忍達のうち一人が、他でもないナギサの父、やなぎカオルだったの
だから。

――

サスケ奪還という目的でナルトたちの後を追うように任務へ向か
うカオル。その本当の目的はナギサの救出である。大蛇丸による妨
害によって失敗したものの、逆口寄せによってナギサの生存とその大
体の位置はつかんでいる。その位置がサスケ奪還に向かっているナ
ルト達の行く方角と一致したことがこの任務につけたきっかけであ
る。

「待ってるナギサ。必ず・・・必ず助け出してやる!!」

ナギサを助け出すために意気込むカオル。その先に悪夢と呼べる
ほどの凄惨な未来が待ってるなど、彼には知る由もなかった。

第一七話 対ナギサ

ナギサを助けに向かうカオル。森の中を木から木へ飛び移りながら高速で移動している彼は前方からの気配を感知し立ち止まった。

視線を向けるとそこには一人の忍が佇んでいる。背丈は少年と呼ぶほどに低く、側面が縫われていない黒いチャイナドレスのようなものを身にまとった白髪の人物。その忍からは殺気などは向けられてこなかったが、その服の正面に音の四人衆などの衣類に描かれていたものと同じ陰陽太極図があったことから、大蛇丸の手下と認識。即座にクナイを構え目の前の敵に迫った。

その瞬間だった。白髪の忍もこちらに気づいたのだろう。うつむいていた顔を上げ、その目と目が合った。その顔はやつれ、人相などは変わっていたが、実の息子を見間違えるはずもない。忍はナギサだった。

カオルの胸に様々な感情があふれる。しかしそれも一つの疑問によりさえぎられることになった。

“なぜこんなところにナギサがいるのか”

カオルが深く考える余裕などはなかった。

目の前のナギサから肌を刺すような殺気が向けられてきたからである。反射的に構えをとったのは正解であっただろう、そうでなければもう勝負は終わっていた。それほど速度、重さの乗った一撃。ナギサのしなやかな腕から放たれたそれによりカオルは大きいたじろいでしまう。それが戦いの始まりだった。

ナギサの息をつく暇もないほどの猛攻。無印忍術など培ってきた技術を込めた攻撃を防ぎながらもカオルは必死に呼びかける。

「ナギサ！俺だ！父さんだ!!わからないのか!!」

その声を聴いても攻撃の手を緩めぬナギサに対し、カオルは言葉による解決をあきらめ、一度ナギサを無力化し連れ帰ることに決めた。そうして戦闘は激化していく。

戦い始めると意外なことにカオルは優勢であった。カオルがナギ

サの手の内をある程度把握しているのに対して、記憶に制限がかかっているのか、カオルの攻撃に対するナギサの対処が甘かったのである。それによってカオルが戦いの流れをつかんでいた。

だが状況は一刻を境に一転する。

ナギサが呪印を展開したのだ。白い肌がひび割れるようにひかれていく呪いの模様。カオルから見たそれはいくつもの蛇のように見え、顔をひどくしかめたのだった。

呪印の開放によって戦いの主導権はナギサの手に移る。驚くべきことだが、上忍であるカオルの戦闘力をナギサのそれは上回っていた。それほどまでに呪印、そして力を扱う者の戦闘センスが高かったのである。

特筆すべきはそれだけではない。致命傷にはならないまでもいくつもの手傷を負わせているのに、傷を負ったそばから治る再生能力。それらの要素がカオルを追い詰める。

そうして追い詰められたカオルは奥の手を出さざるを得なかった。昔、模擬戦をした時のように。

目の前にいる忍の排除。大蛇丸から命じられているその内容は、ナギサにとつてそこまで困難なものではないように感じられた。確かに敵対している者の戦闘能力は高い。しかしながら、呪印さえ開放してしまえばその戦闘力も脅威にはならない。そう考えるナギサ。

実際に呪印を状態1までもっていくと明らかな力の差が表れた。決着がつくのも時間の問題だろう。

高度な体術に水遁を混ぜ合わせた戦闘スタイル。それによる濁流のような猛攻を受けきれず、敵に明らかな隙が生じる。それを見逃すことなくチャクラを込めた拳を放つナギサ。戦いは決したかのよう
に思えた。

しかし次の瞬間ダメージを受けていたのはナギサのほうであった。自身の身に起きたことを遅れて理解する。拳が当たる寸前、敵の右手首を中心に強烈な風が起こり、その勢いのままナギサは吹き飛ばされたのである。

土煙の中から現れたのは先の忍。加えて男を取り囲むように浮遊している蛇。いや翼や角を持つそれは龍と呼びべきかもしれない。龍からは異様な気配を感じた。大蛇丸の気配にも似たものをナギサの体は敏感に感じ取り、警戒を強め、その身を構える。

「今回は模擬戦というわけではないようようだが・・・どういっつもりじゃカオルよ」

その声には威圧が込められており、その所作一つ一つがナギサの警戒心を高めさせた。

「殺し合い、したいわけじゃあないんですがね。どうにも息子が強すぎまして」

敵である忍も口寄せ下であろう龍に、敬意を払っているのが感じられる。

「確かにいろいろ混ざったようだのう。なかなか手こずりそうじやな。どれ、久しぶりにあれをやるか」

その言葉を聞いた敵の忍の表情は、少し驚きの色を見せた後、覚悟を決めたものへと変わった。

「やりますか・・・」

人龍一体」

第十八話 人龍一体

突如として、暴風が吹き荒れた。風が土を巻き上げ、敵の姿を覆い隠していく。目も開けてられないほどの風の強さにたじろいでいると、円の中の反応に違和感を覚えた。

先ほど現れた巨大な龍と、戦っていた忍の存在が、そのチャクラがダブったように感じたのだ。

(いったい何が起こってる?)

しばらくすると、巻き起こっていた風がやんだ。そこから現れた人物。その風貌を例えるなら、龍の化身だろう。

先ほどの忍と比べて少し大きくなった体つきに、白い鱗が覆う手足、額の横からは黄色い大きな角が伸びている。その角は、武器としても使えそうなくらいに鋭くとがっていた。

「悪いが長くはもたない変身だ、一瞬で終わらせてもらう」

そのとき体が軽くなった。遠くなつていく地面を見て、自分が吹き飛ばされた事実を認識する。体中を走る痛み、臓器にも深刻なダメージを感じた。

(治すにしても、これでは時間がかかる…態勢を——)

立て直す時間。それをあたえてくれるほど、目の前の敵は甘くはなかった。

空中に向けた追撃。ノーモーションで放たれた空気の塊が計二発。避けることもできずにそれをモロに受けた。

視界が真っ白になる。遅れて地面がひっくり返ったような衝撃が二回。さらに遅れて体中を激しい痛みが襲った。そのまま空気にもまれながら、地面にたたきつけられ、その衝撃にまた体が悲鳴を上げた。

このままじゃ殺される

大蛇丸との鍛錬、そして肉体強化のための薬物投与。どちらも激し

い痛みを覚えるものだったが、これほどの恐怖、感情を抱くようなことはなかった。

死への恐怖が、ナギサを支配していく。

なぜ死ぬ？

――目の前の敵が殺してくる

なぜ死ぬ？

――敵が想定より強かったから。

なぜ死ぬ？

――僕が弱いから。

――それなら。僕がもつと強くなればいい。

ナギサは、無意識に呪印の力を抑え込んでいた。呪印細胞という他人の細胞への潜在的な拒否反応と、そして、自分がなくなるといふことへの恐怖からだった。

比較的症状は軽いとはいえ、呪印状態でも精神的な作用は確かにある。生まれてくる強力な殺人衝動に身をゆだねることを、記憶をなくしている状態でも、ナギサは避けようとしていた。

その枷が今、死への強い恐怖によつて解き放たれていく。

体の奥からあふれてくるどす黒いチャクラ、その流れに身をゆだねた。

――

人龍一体。それは優れた忍と口寄せされた龍による秘術である。チャクラは何倍にも増幅し、さらに自然エネルギーを使う龍と合体したごとによる仙人化。極めつけには、忍術と体術の分担による戦闘の効率化が可能になる。

ごく一部の才のある忍者にしか許されない技な上に、龍とのチャクラ量の比率、相性も重要となる。

カオルのそれは、術としてはなる立っているものの、完成度としては7割という程度ではあった。しかし、それでも圧倒的な戦闘力。勝負は決したかのように思われた。しかし…

突如として、ナギサの様子に変化が起こった。

チャクラの奔流としか言えないほどの爆発的なチャクラが、ナギサから放たれていく。

それに対しカオルは、先ほどの空気弾を牽制として放つが、チャクラの膜に阻まれてしまう。

「なんだこれは……？」

動揺するカオル、それを尻目にナギサの肉体に変化が始まる。

状態2は、呪印による疑似的な仙人化といってもいい。しかしオリジナルの重吾のそれも含め、結局は紛い物である。ナギサの変身もそうであるはずだった。

大蛇丸でさえもそうなると考えていた。うまくコントロールできようならナギサの強化。できなくても本命であるサスケへのサンブルにはなるだろうと。大蛇丸が知らなかったのは、ナギサのチャクラコントロールのセンス、そして仙術への高い適正である。

呪印を使って集められていく自然エネルギーは、精神エネルギー、身体エネルギーと合わせ、自動で仙術チャクラとして練り上げられていく。しかしその要素同士の配分や、自然エネルギーの質、純度の悪さを感じ取ったナギサは、無意識化で呪印の制限を外そうとしていた。

当たり前なことだが、呪印を己で解除することなどはまずありえない。あるとするならば、かけた側と、かけられた側の力の差があまりにも離れていた時ぐらいであろう。

しかしこの瞬間において、その仮定は成立している。今のナギサはチャクラ量、コントロールとともに、大蛇丸を大きく凌駕していた。呪印の管理から外れるほどに。

それはもしかすると起こり得なかった事実かもしれない。大蛇丸が普通の呪印以上のものを与えていたこと、ナギサの力が想定を超えていたこと、そして生への強い渴望。それらが引き起こした、呪印からの解放。これによって何が起こったか、それを知るのはこの場で、

いやこの世では当の本人であるナギサのみであった。

チャクラの渦が収まり、そこから現れたそれをみて、目の前の人は本当にナギサなのかと、カオルは直感的にそう感じてしまう。

外見に関しては大きな変化は見られない、むしろ体をめぐっていた呪印が消え去り、記憶のナギサに近づいたといってもよかった。

問題はその中身、チャクラの質、雰囲気とも言えるそれを、人龍一体によって強化された感知能力で感じていた。ひりひりと肌に張り付くような、どす黒いチャクラだ。仙人になった身をもつてしても恐怖を覚えるほどに。

そして顔を上げたナギサの頬には涙が流れていった後のような黒い痣が浮かんでいた。

「カオル、おぬしもわかっているとは思いますが、あやつは確実にわたしのいるステージに上って来とる。今はまだわからんが、この急成長。今後どうこうできるかわからんぞ」

アマツもそれを感じ取ったのだろう、カオルの内から呼びかけてくる。

（アマツ様の言うとおりのだ。ここを逃せばチャンスがあるかもわからん。人龍一体もそう長くはもたない。なら…）

「…全力で行きます」

ゆつくりとナギサを見つめるカオル、その目には、強い覚悟が込められていた。実の息子を手にかけるという覚悟が。